

答え合わせ・解説

問1	答え 1 行基	当時の政府は「僧尼令」によって僧侶が寺の外に出て活動することを制限していましたが、この人物は民衆を救うために各地で実務的な活動を行いました。その絶大な影響力と土木技術などの専門知識は、後に聖武天皇による東大寺の大仏造立を成功させるために必要不可欠なものとなりました。
問2	答え 1 租・庸・調	律令制度において、農民には主に3つの体系的な税が課せられていました。「租」は口分田の面積に応じて収穫した稲の約3%を納めるもので、主に地方の財源となりました。「調」は繊維製品や海産物などの各地の特産物を、「庸」は都での10日間の労役（歳役）の代わりに布を納めるもので、これらは都まで運ばれ国家の財源となりました。江戸時代の「年貢」や明治時代の「地租」と混同しないよう区別が必要です。
問3	答え 1 行基	奈良時代の仏教は本来、国家の安泰を祈る「鎮護国家」のためのもので、僧侶が一般の民衆に直接布教することは禁じられていました。しかし、この僧侶は独学で修行を積み、土木技術を駆使した社会事業を通じて民衆の信頼を勝ち取りました。その絶大な影響力に注目した聖武天皇は、のちに彼を大僧正として迎え、東大寺の大仏造立への協力を依頼しました。
問4	答え 1 鎮護国家	聖武天皇は、天然痘の流行や政治的混乱が続く中、仏教の力によって国家の安泰を図ろうとしました。この思想を「鎮護国家」と呼び、これに基づいて全国に国分寺・国分尼寺が建立され、その総本山として都の平城京に東大寺が、そしてその本尊として大仏が造立されました。
問5	答え 1 鎮護国家の思想	聖武天皇が位にあった奈良時代前半、大規模な疫病や政情不安が続いていました。天皇は仏教を深く信仰し、その力で国全体を災害や病から守り、安定させようとしていました。この「仏教で国家を護持する」という考え方が鎮護国家の思想であり、東大寺を総国分寺として全国の寺院のネットワークを整えました。
問6	答え 1 ①口分田 ②墾田永年私財法	班田収授法において、6歳以上の男女に与えられる土地を口分田と呼びますが、人口の増加に伴ってこの土地が不足しました。政府は当初、三世代に限り所有を認める「三世一身の法」を出しましたが、期限が来ると土地が返還されるため農民の意欲が上がらず、最終的に永久私有を認める「墾田永年私財法」へとつながりました。
問7	答え 1 佐渡国	律令制に基づき設置された令制国の一つで、現在の新潟県にある佐渡島全域を範囲としていました。五畿七道の区分では、越後国などと同じく日本海側に位置する「北陸道」に分類されます。選択肢にある能登国は現在の石川県の一部、隠岐国は山陰道に属する現在の島根県の島々、対馬国は西海道に属する現在の長崎県の島を指します。
問8	答え 1 遣唐使によってもたらされた唐の文化と仏教が融合し、国家の安定を願う性格の強い文化が形成された。	天平文化は、遣唐使の往来によってもたらされた唐の進んだ文化や、その先の西アジア・インドなどの国際的な影響を強く受けています。また、社会不安を解消するために仏教の力を借りようとした聖武天皇の「鎮護国家」の思想が、大仏造立や寺院建築といった形で具現化された点が、他の時代の文化との大きな違いです。
問9	答え 2 人民の構成を正確に把握し、収穫した稲の一部を税（租）として確実に徴収するため	班田収授法は、国家の財政基盤を支えるための重要な制度です。戸籍によって性別や年齢などの人口を把握し、それに応じた口分田を割り当ててすることで、対価として「租」という税を課しました。これにより、国家は不安定な私有化を防ぎつつ、安定した税収を確保しようとしていました。
問10	答え 2 調	律令国家が全国を支配する仕組みの中で、成人男子には複数の負担が課せられました。「調」はその土地の特産物を納めるもので、都の財政を支える重要な財源となりました。これに対し、収穫した稲を納めるものは「租」、都での労働の代わりに布を納めるものは「庸」、地方での労働奉仕は「雑徭」と呼ばれます。